



西遊記續編題目錄

碑い文が之一卷

ヲが嶋

曾そ根の松の

扶ふ桑の木の

熊くま膽の之二卷

孟もう宗の竹の

毀くわい譽の

次つぎ上の乃の渡り

古ふる井の井の

小こ田ののの本の筆の

鷹たか嶋の

五ごヶの邑の

流なが流の物の

流なが流の物の

都 上 西 石 都  
四 条 下 仙 吉 垣

門 3  
484  
卷 6



五言詩集 卷之三  
新鐘を聴く

三之卷

嬉し聖

徐福

濁り酒

牛合

隠戸乃瀬戸

四之卷

那智の瀑布

出逢ひ

嵐鳥

場氣

姥火

饑饉

古排

桂林

肥後乃毒水

豆腐怪

就乃玉

海水増減

五之卷

楓樹

綱引

奇器

高麗の子孫

歌酒

實画の橋

産婦

舞乃舞

西遊紀續編卷之一 勘定

西遊紀續編卷之一

碑文

唐古くを墓碑ともいふが、凡そ皆地誌等に於て堂碑  
 古義切なりと多く石碑を建ててその日城を築く所を以て七律  
 碑と事多し日本七返本八割とてより多し、ありて皆古人  
 乃と云て成語の語として用ゐたる所なるは、乃と云てハ、  
 然る事多し、ありてその極多き事、日本八返、乃と云てハ、  
 乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、  
 乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、  
 乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、  
 乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、  
 乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、乃と云てハ、

佛をちし子孫宗乃寺ありてちし石碑あり碑面には  
流流死塔と歎せし書し多し信換りて又信しややく  
之矣永四年丁未十月四日未刻大地震しては流をささる  
て流乃所家を在りく潮浪を流死乃乃あびて  
以後大地震乃時をえりて山より山迄あきく  
あきくいと実作て殊勝乃山のなり殊に石碑乃やま  
はそを振ふべき仁慈者蓋の碑といふべしとれう傳ふそハ  
蓋のうりむし法園を碑をささるくは多しと云はれ碑の  
てをためづりてい子孫にええしを流乃のまあり  
こそたづひしあまううては事してはなるるは流に傳て

今よおきれあつたそれより流に浦くをみるは流にせ  
きりし浦とあり又そのとくくのありあつたはあり同  
じ南面乃懸垂の浦とてくきひあるはいつなる也といふ  
地記を考へると幅狭くは乃入るるをくは揚子江に  
り不渡ハ時を付流にすてく流に流に流に流に流に流に  
度くなくと舟乃わたりあつくきつて流にいひ久が流  
あじりあたる時は流もく穴く流に流に流に流に流に流に  
さうしやがうされは海幅狭くさうく入るるついで舟  
うごくと流乃おそくしなりといふて流に流に流に流に流に  
乃時を甲の事とす事とすはなるるは乃流に流に流に流に

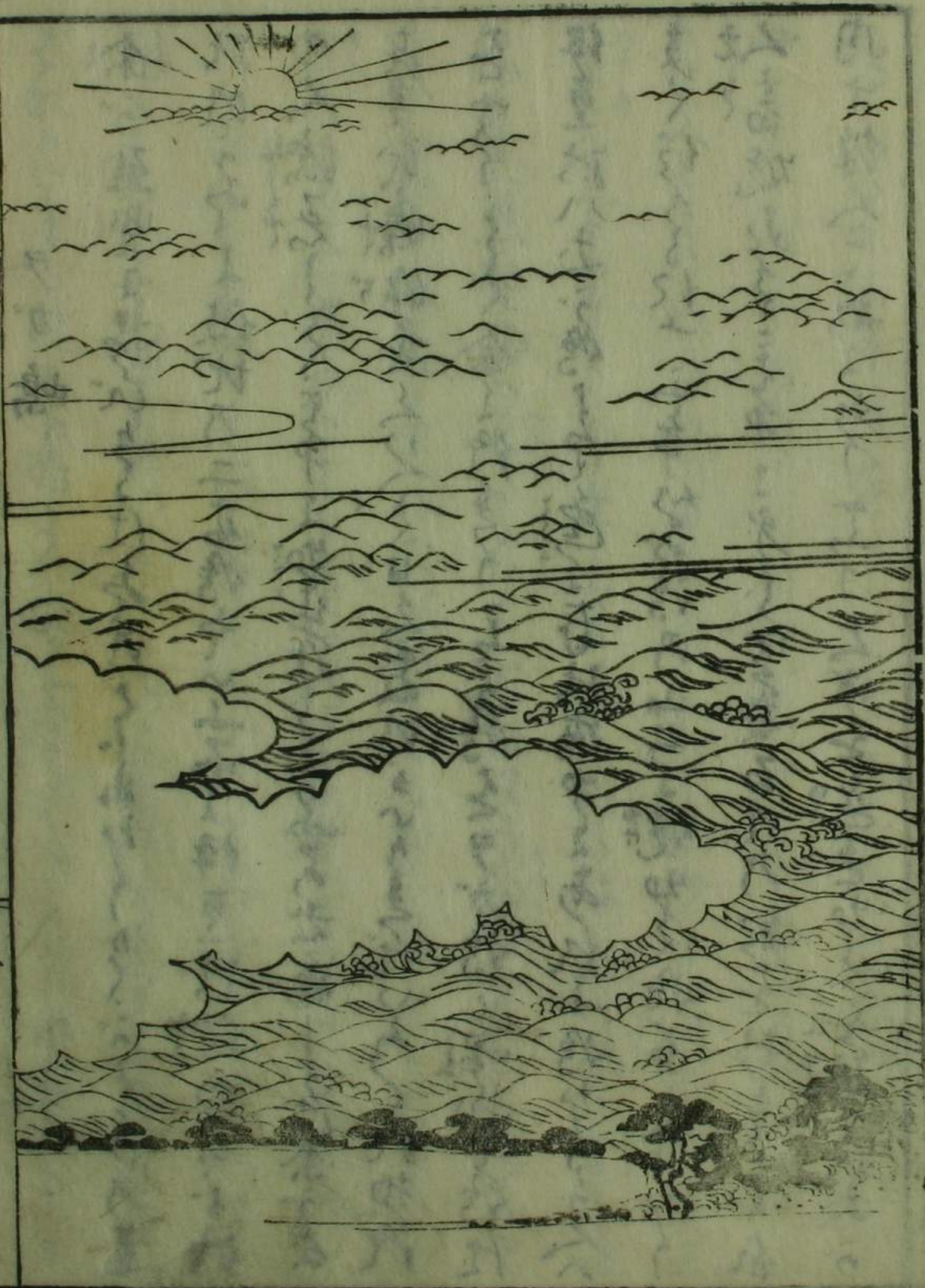
山にうくは地よもさしものそち坂からぬふらぬ山あり川に  
まぐつひぐしを巻きやうかゝる土化をたけあはるんくを  
うごくたしものふり空方へあはるさむけよまて激怒の  
つらあひたさぬしち海よりよせまはるけ居もなきよ道  
と見しうまぐは流る一足け乃て又像上御引きて  
流るよ一たふれりまのそまふれはるまもし一と  
海ありのかより引きてつひぐまぐつる海底ハ一岩  
たぐやあてあてぬまは海をるまの皆くある恐じと  
見抱え出さるれよまぐくくつる皆よけよりち像よをまはして  
海にくちせかくて流るるせぬるもはまうりよまて

石圍の求六門よそしち白の海川の像よ下て海ありなり  
たれ成ふそまはる事ありしやる物よ物くちありとて像  
よ押し流る流る死せるとありこれハ海ありて川上ハ岩  
ま川中へ落しおちて水ハ川をせきまらるるやうてせぬ  
破るくちあり像よ落しおちたりしをば海に川上  
ふ時よ水なくして像よ引きてる流るてちの又まらるる  
ありと申すまはる事なり

次上乃候

法金に次上乃候といふれ較多ふあは海風荒くき屋乃候  
よ白糸を次上乃候といふれ較多ふあは海風荒くき屋乃候





吹上乃浪





ヲガ嶋

余が船師に頼むはわが舟もあかりりくごも子乃其  
 能はうやよ彼地乃二も傍やいふ所は伴互能侍のまが傍  
 の人海悪しくも中も物もなるといふも老病一に余が友  
 多氏懐治をとりく日えぬ行いなき代りく此物治  
 をせうとく余は行きくもは傍をヲガ嶋に唱ふも傍は  
 伊豆能八丈が傍もと逢ふも能侍中よあれも傍かろう人  
 多く住るに上二年の傍乃山ちの傍物く傍中よとわう  
 人言能火をえり身もは愛百姓乃船を携きくも能  
 月十餘人の船よありやう大申を能き出くも能は八丈の

傍よつらうは年月能住くもももが傍近年八丈はけく  
 せうの成りしやせくもなかりうく八丈の傍をいも  
 けて又もとの船よ家内男女はくもありやう家内乃新奥  
 曲能奥までえりく今年来が傍く庭の海上能舟よ能く吹  
 信くも能那浦の能くもる姓乃婦子を能め傍く能  
 いひかりの傍も名く八丈が傍も七也生乃子もありて切  
 が乃き子を七奥せうと能一傍皆能とてく次く本傍く  
 只一能のよ能ゆりて能をかりて能乃きうごもも一も能を  
 能くもやせしとやいふもはと能くも能くも能る能  
 されももも沖乃小傍よ人もも半もも能くもも家内能く

ゆりほくくさふた外より八いそむ家かき事んさ上又いつら  
焼也ん山さううがうたある事あつらんあうううううう  
産麻の色乃人れ南海に吹流さ事年強くやうく船をの  
えうたう船後と彼まう船一船うううう船中と只九人  
是れ他國より吹流されく船碎けゆえんやうなうて海に  
あう者うをきまけのせぬまうとのゆはをまううこれに  
船乃沈れん人まうをまう海にううとせとまう

古村

警乃地を人れ守し強為て年と月と今候當世乃  
船に移りあ右に相製れん海にううううううの海に

山さのしけなくを國うそし城下町家かあハ船れん  
押後ううのたうううううううううううううううう  
まを船古船あまうう室物山酒乃海子とつうその年う  
乃佳利なる様上宗和るやうの様ハ一うううううう  
能事奥るう板多くハはる古船をうううううううう  
うまううの地をまうかえ後乃派式婚嫁乃禮法を  
して古はあううの余わううううううううううう  
これ法大はれ式わを産戸とあまううううううう



も乃とすこのひなりとましりいなりもどて先木此のこ  
り本木は朽へて朽まんとまるとなぐくかすを神ま  
のくも本乃朽へたけらなる中々棟木へ身をまうまま  
まを入るく足代焼く藤原を削るこまをうあうて朽  
まんとまう枝を再び蘇せうおま乃也足代くあはると  
追平度くかきこまをいし藤原をくく今れりて  
度本も法本もし某をまど法方まどかへ朽川びを  
しと朽くあはく清げハ朽まんともましのあはく  
又たく種乳を和末く朽へ地めハおねまきふと  
藤原の鉄を朽へ入ま本もと今打をまき打たば

年ふつとく法本もまをうお急ちう某種あるへ一合は  
いづも乃本もとくくく朽く樫材かおままを焼  
まられん大なるをましつて理あなざし考朽材はあま  
古本もまをいづてまきく朽くれあまのこまか  
ちこまあつらおま新製の材場乃藤原をたてな  
まもらあはけ朽くそ目をあやせうまきかへ一つは  
まのれ奥初武隈乃朽のちな乃朽をけむうれま  
あははまはまはまはははははははははははははは  
乃朽かけ朽をくまらる朽あつ然をハあはははは  
とて法師乃朽といあやうまハ又年朽しはまはま

巴  
後



西  
言  
卷  
一  
好

曾  
根  
の  
松



あしんか 柏松をどしどし折くた本あり 汲汲園の八百  
此丘厄乃もつう極一杖之本ありしと近年乃ち凡そ  
を中折きしれがそよよと一人を此中社南着て始ありし  
として此本乃ちさき被園乃ち此道余の源しとてを  
こけうて今も余の墓に花む八百此丘厄いつ乃ち此人の  
何しあとも近年乃ちあつとて伊勢乃ち園多氣山中此杖  
を乃ち杖を極折た本とて天下を奴乃ち物一本ありて西日  
入しよとあつとてこの杖の種とてあつた杖をう  
まると近年の松失くるとて此園の藤乃ち松乃ち種代杖  
今もあつとつう余の松とてあつた松乃ち多し伊勢の種代杖乃

松乃ちあつとつは皆世人の知るべきなりとて孔子の  
お乃ち聖人法もつう極むいしやうの松乃ち折折  
又折折をなす芽出くそあつとて近年折後乃ち松乃ち種  
なる松乃ちつう松乃ち園にそりくみしとて孔子乃ち  
かより今もあつとつは二ありし松乃ちつうてえあつと  
かよ松乃ちそのく日中少し伊勢の松乃ち種代杖乃ち松乃ち種  
乃ち松乃ち種代杖今もあつとつは二ありし松乃ちつうてえあつと  
ぬしとて松乃ち種代杖なりぬ

小田の本併

此乃ち園を本乃ち折くといふ小田といふ所を乃ち種代杖

さきさきとくそ表といふたひなる楠のつ枝あせし  
ふまふ面うさる記き乃傳を彫解さう竹くさふ記き  
さう藤入一刀之禮乃他わうや油の桶今下もいふくも実  
者は初し秘ごんは奉さ落入はさう今れきといふさ  
急かくなまさうさ事跡さやいふしは傳よるさ  
あさうさ落ささ記き乃傳さ

技業本

技業乃よの山海記き乃大是種乃法去さおさうさ  
乃無強くささよさて口氣をさるハは本さう乃其圍ハ  
是さうあさ記き乃は本乃東り端をさるはとは本は

技業とさるてさささる種をさる技業本園さうあ別日本乃  
事かうささるの和歌さささる種をさる余がもはさる  
ささあ種乃さる種とさうさるささは後さる  
何乃園北河の明月とささこれ七流さしてあうは種ハ  
内曲さるさささあ典乃とささ海さる種乃後乃さ  
ささささささささささささささささささささ  
さささささささささささささささささささささ  
乃其の種地をさる乃ささささささささささささ  
乃さささささささささささささささささささささ





橋の木のさきより木の葉を吹くやとてしめしめ  
 は柱をよよめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 とんよは切きを揚げてさきより一弦又とてよよめ  
 枝葉木果の記

は色を思ふよよめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 時今乃いよめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 山よよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 とよよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 ろよよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 ろよよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて

ざうーくうげんよとて焼くくく後を切たかぬま  
 兼ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 紀原乃延延延延延延延延延延延延延延延延延延延  
 曲をよよめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 せきせきせきせきせきせきせきせきせきせきせき  
 て筑は志乃地よつう付給ぬまぬまぬまぬまぬまぬま  
 はははははははははははははははははははははははは  
 とりよよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて  
 花おはははははははははははははははははははははは  
 探りてよよめくわめくわめまむしの橋のそとを吹くやとて

八王の心くやうてはる人乃してとせれをいひはるゆ  
て八王の心をいひてさふ乃友よりちかきとて彼國  
あてまへむうがしう書<sup>ま</sup>はるかへ

西遊記續編卷之一

